



「はへっ、はへええ、おっおしり……れびいら」
「めっ、抜いて、もう入らにやびいらい」
「ああ、じや一氣にいくや」
「びえ……ちゅっ、ちゅっく……」



おはしりおはしりおはしりおはしり

「はへっ、はへええ、おっおしり……れびいら」
「めっ、抜いて、もう入らにやびいらい」
「ああ、じや一氣にいくや」
「びえ……ちゅっ、ちゅっく……」

「ふふりの穴で汁漏れ出すのは困るから止めた」
「ふふふ、あれは、あれは」
「ふふふ、はい」
「ふふふ、はい」





鬼風 源司
俺の名前である。
顔やら目付きやら体つきやら、もろもろ敵つい俺にはびったりな多前
なのだろうが……
せめて多前だけでも、もうちょっと柔らかい響きだったなら、もう少し
近づき易くもあったのではないかと思わなくもない。

まあ、こんなナリだし、降りかかる火の粉は振り払う主義だ。

不良だなんて言われた所で甘んじて受けよう。

(勉強は頑張ってはいるが成績は振るわない)



まあ、どうでも良い俺の話はこんな所でいいとして、こんな俺にも友達と呼べる奴は一人居る。

月村唯 ッキムラ ヌイ (●○)

小学校の頃、気弱で優しい性格が災いして虐めの標的にされかけていた所を助けたのが切っ掛けで……なんだがんだで、それ以来の関係だ。



だが……



「おい、コイ。今日で一週間も学校休みって前、どう言う事だ？」
「病気なのかと見に来てみれば、部屋からずっと出てきて無いって
前の母ちゃんも心配してんじやないか？」



「ケ〜」
「ん……」
（なれや、やけに声が高いまよな）
「お願い、帰って」
「お前……もしかして、また虐められてんのや？」
「え……」

「別に、いじめる側だけが1の%悪いだけ、虐められる側にも非があるだけ……そーゆーアホみたいな事は言う気はないが……」
「一人でウダウダ悩んでるんじやねえよ！友達だろうが！！」



「ちが……♡?」
そんな声が聞こえてきた頃には俺はドアを蹴り開けていた。
そして中に居たのは見慣れたコイの姿……ではなく。



「間違えました」パタン
「あれだけ豪快に熱く入ってきておいて閉めないでよケン♡?」



「いや、いやいやいや、まて俺はみ前なんて知らないぞ？？アイツに
妹が居たなんて聞いてないし、あれか？従兄弟とかか？」
「そうじゃなくてさ」





「TS病……ねえ」
「そんな全くもって信じてないって目で見ないでよ！ホウだって半信
半疑なんだから……」
「いや、あまん……」
まあ確かに見てみればアイツの面影がまったくないって事も無いんだ
が……



「ゲ…ケン…ううっ、ありがとう…」
「ああもう泣くなって…」

「………この先の誰にもいいせなかつたし、ケンだって気持ち悪いって思っちゃうよわ……」
「なっ……お前なあ、俺を見くびるのもいい加減にしてあげよ？」
「俺はなあ……たこえお前がどんな姿になった所で、んな下らない理由でお前の扱いを変えたりなんかしねえ……」



と、大見得を切ったのが一週間前…

「おえ、ゲンいっしょにやえろ〜」

「ゲン、スマ●ラ発売したわけだし徹夜で対戦しようよ！泊まりに
いっていい？」

「おえゲンおわけい！一人で服買いに行くの怖いし着いてきてお願
い！わけっ？」



早くも掛けようぞ


「何だあの可愛らしい生き物は！男の頃もあんな感じじゃあなかったが
……♡」
「それにしても無防備すぎるだろうおまめ」





一週間後

「わっわわわ、わえ……ごごご、ごうかなこし……」

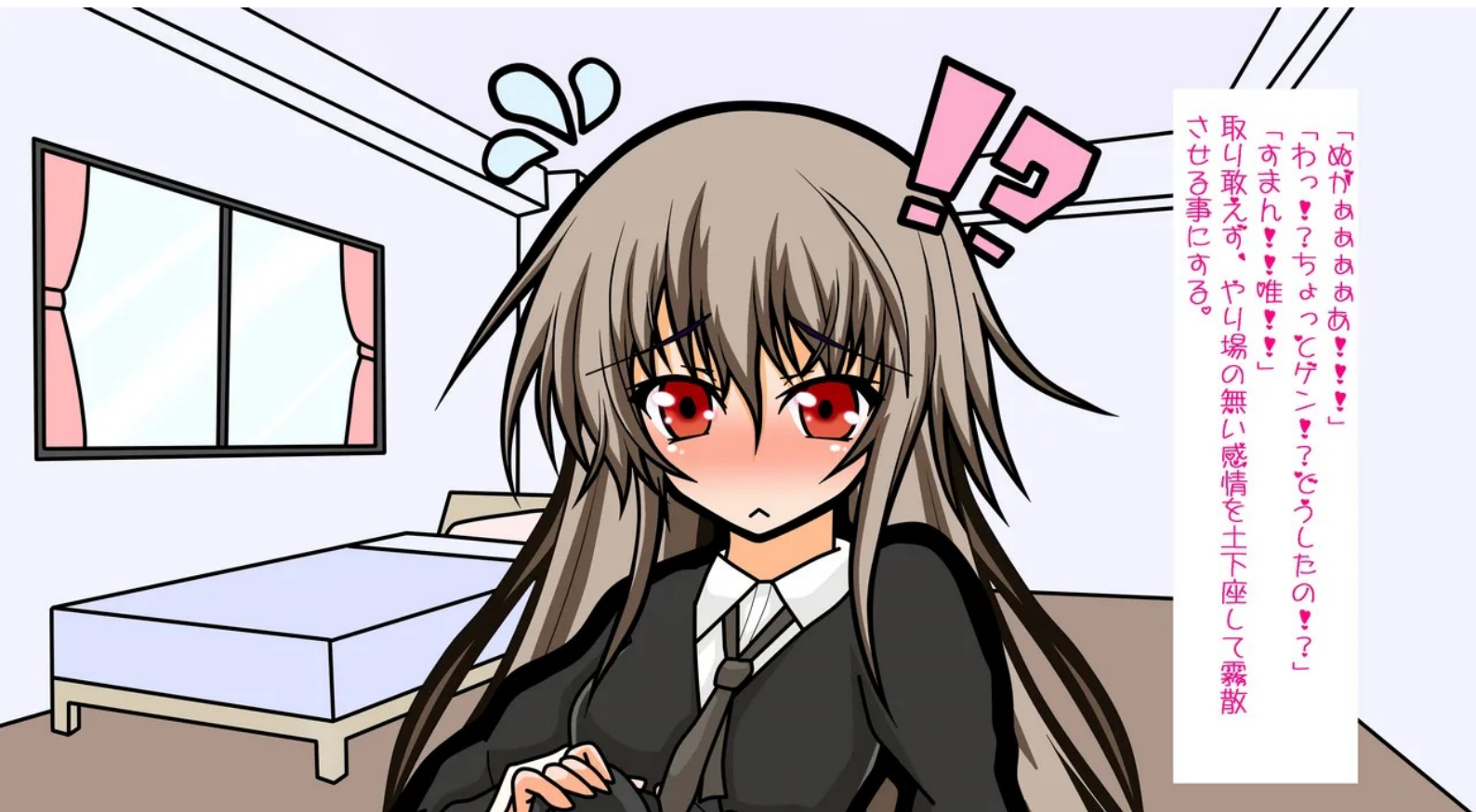


流石にいつまでも男物の制服という訳にはいかな
いので、頼んでいた女ものの制服がやって届いた
らしいのだが……
わざわざ呼び出して着て見せてくるか？！しかも
俺だけに！


「あっ……ああ、いいんじゃないか？」
正直、ただでさえ、女の子としか見えな
い外見で
そんな事されるのは、そのだな……



「そっ、そうかな……えへへ、良かった。ゲンに
そう言っただえて。これなら安心して学校にいけ
そう……」
あ、うん駄目だわ。



「ぬがあああああ♥♥♥」
「わっ♥♥ちよってげん♥♥?どうしたの♥♥?」
「あまん♥♥唯♥♥!」
取り敢えず、やり場の無い感情を土下座して霧散
させる事にする。



「えっ？えっ？えっ？ちよちよちよって、頭あげてよゲン♥どうしたの♥？」
「いや、そのだな、お前はお前だてかなんてか、格好つけた事いってその非常になんていうか、情けない話なんだが……」
「いや、お前はお前だし、その気持ちは今でも代わりないんだが……」

「いまのお前は見た目は正直、そのだな非常に俺の好みと言うかなんていうか……その、な……」
「そっ……それって……」
「……ああ、うん悪い。正直女として意識しちまってる……」

「やっ！でもだな！今はまだお前の変化に
対応できてないだけで、もう少し時間がたてば慣れ
てまた何時も通りになると思うんだ！」
「だから、その…それまで、お前にも嫌な気分
にさせちゃう事があるかもだが…そのま
ま……」



正直、今一番戸惑っているのは唯なんだろう。
そんな唯にこんな事を言ったら余計に傷つけてし
まうかもしれない…
ただ、俺はそんな気持ちを隠し通せる程器用な男
ではないのだ。それなら、例え唯を傷つけてしま
うとしても、せめて傷が浅い内に……

「ゲ…ゲン」
「あぬ、あまな…い♥?」

「ゆっ、ゆい♥?お前なにやって♥?」
「だっ、だって前、ゲン話してでしょ♥女の子が
恥ずかしそうにスカートを捲り上げるポーズがそ
ろるって♥!」
死ね昔の俺。





「ゲンがボクの事、今の姿、好きだって言うから
……ボクなんかでも、ゲンの事、喜ばせてあげら
れるかななんて……その」
「ぐっ……そりゃ、正直ぐっつては来るけど……
お前の気持ちも考えずに……」
「いいよ……」



「ん？」
「ゲンなら、いいよ……いつもゲンに助けてもらってたし……それに」
「ゲンなら全然いやじゃないから……それにどっちかっていうと、今、凄いだキドキしてて……」

ああ、うん、もうだめだわ…我慢できる訳がねえ…



「ほら、ゲンが好きだって言ってたセーラ服だよ」
「お前、こんなのも買ってたのか…」
「えへへ、ゲンが喜びそうだなって思ったらついね、
ほかにも色々買ってあるけど…」

「本当に、オナニーみせるだけで良かったの？ゲーンなら、なにされたって...」
「バカ...そんな事、ある程度馴れてからじゃないと俺のが死ぬ」



ドキッハートを奪われるな。
「それ、威張って言うことなの？...」

「まあ、それにお前に無理もさせたくないし、途中で
こまる自信もない」
「そっか…ありがて」



「で、お前、その体になってからしたごめなの
か？」
「あっ、ううん……正直、こわくてまだ……」

「ま、当然だよな…いいんだぞ、無理しなくて。まだ
今なら冗談で済…」
「やだ」



ああ、そう言えばコイツ、わりと言い出したら聞か
ないんだっただな…
「それこそ、やっぱりケンは、こんな身体気持ちわる
い…?」
「…っ! バカんなわけ無いだろ! 現に今だってお前
みてこんなになってるわけ…」
下半身は正直である



「なら決まりだね、ポクだけにさせるのが、あれなら
ケンのもポクにみせてよ」
……はめられた



「じや…じやあ…いくぬ…」
クチユツ
「~~~~~」
「こいが軽く手を突っ込んだだけで身体をじゅじゅと仰
け反らせる」



「じや…じやあ…いく女…」
クチユツ
「~~~~~♡♡♡」
こいが軽く手を突っ込んだだけで身体をじくじくと仰
け反らせる



「しゅっ、しゅっい……なにこれ……男の時て全然比へ物ににやならにやい……」
「んひ……はへええ……へ、へんにや声でちやるさう」
「わっわえ、ゲッ。どう、興奮する……？」
「ああ、滅茶苦茶興奮する……」

「ぞっか、みかった……あひっ……はへっ……嬉しい……」

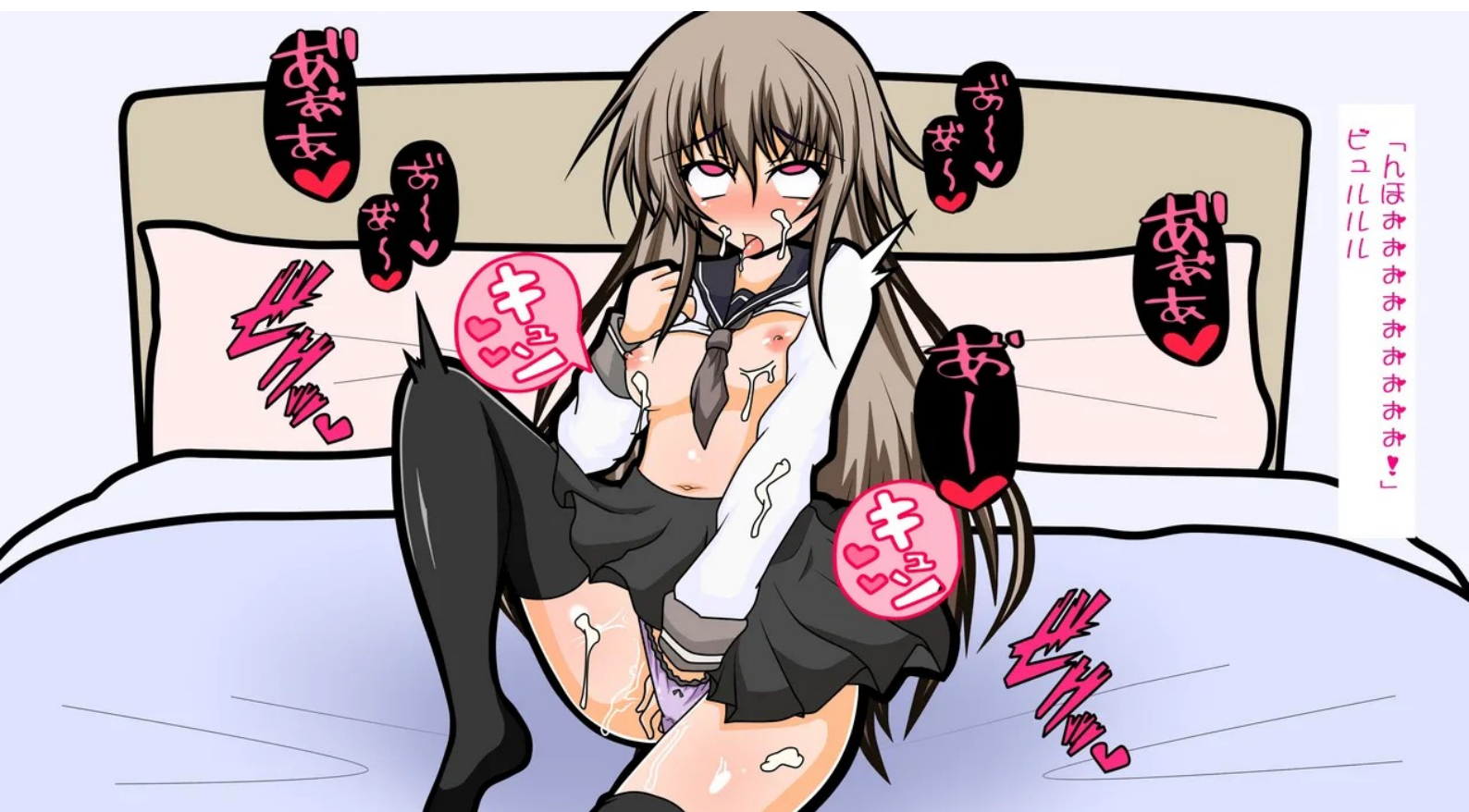


「こんなの変態だよわ……ゲンにおまんこ、クチユク
チユ弄ってる所みられて気持ちいいなんて」
「でも、おまんこ気持ちよくて……指がまんこにやいの
……あへっ……はへえええ」

「もって見てええ、頑張っておまんこクチュクチュ
りゅかりやあゝ」
「エッチで変態な姿みて、もっておちんちんシッコ
してええ」



「あゝ...あゝ...だっだめ、いくっ...いっすちやう



「んほおおおおおおおお」
じゅるるる



「あっ…おまん、つい夢中になっちゃまって」
「いいよ…ゲンのなら嫌じゃないし、少し嬉しいが
ら」
こうして、俺とユイの少し変わった関係がはじま
った。

「ええ…本当にこんなんでいいの…?」
「ああ、やっぱり男として一度は憧れるだろう?」
「足」



「うん、やっぱりゲンって性癖人では少しずれてるよね。エロゲのチヨイスみて何てなくしてはいたけど」



「うぐ、お前だって結構でぎついのが意外と...」
「わーちよって♡いつのまに見てたのさ♡」
ぐにゅ♡
「んおっ...♡」



「あれ...? ケン?...へえ、ケンって本当にこんなんで感じちゃうんだ...」
「ほら、シー「シー」...気持ちいい?」
「ああ、そのまま頼む...」



ジュリリリリ♡

「わびっ♡?」
「いっちやっただよ、本当に足なんかで感じちゃっ
てただよ」
「うぐ…悪かったな」



「ううた、感じてみたくの顔めく見られて楽しかった
し」
「……はははははは一回こぼすぞね」

「ちよっ、まだいったばっか…」
「だーめ。感じてる顔いっぱいみせてね」
あっ、なんかコイのってきてる……
「ほらほらシーコシーコ、おちんちん、こんなちよっ
ちよな足に逆らえないなんて可哀想だよねー」



「タマタマだってちよってかいたら潰れちやうんだ
女？ほらほらぎゅちよちよ」
「あっ、ビクビクなってるいくの？いっちやうの？」
「ほら、おちんちん足で苛められていっちやえ……♡」



「あはは、いっぱい食べたね。いーこいーん」

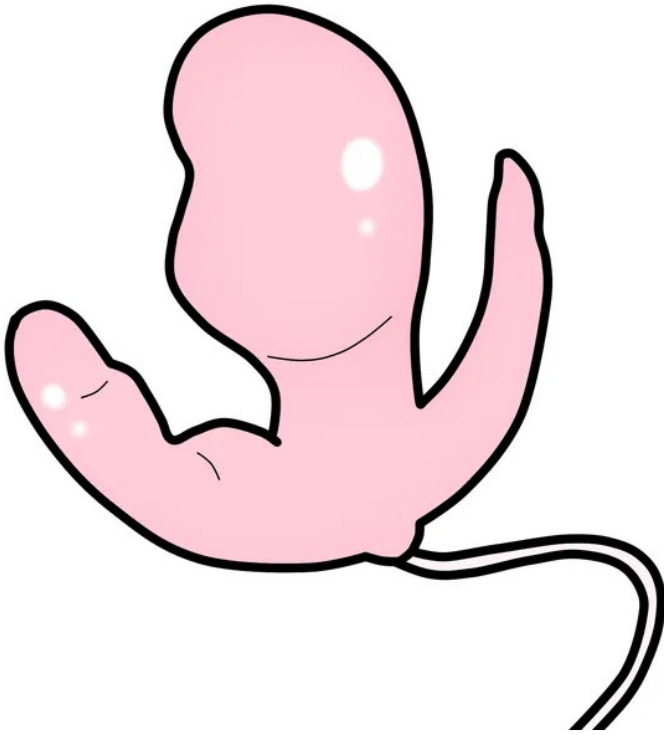
じゅるじゅる



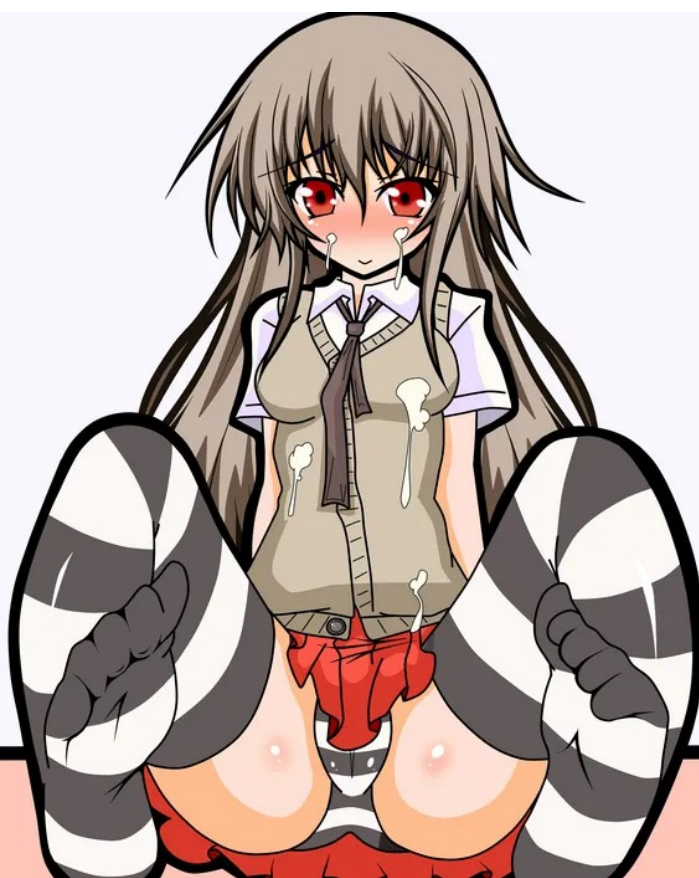
「ぐさちう…」
「ん？ケニ？」
「うがぬぬぬ♥」
「え、なにっ？なにっ？」



「やられたばなしは何かシヤクだ!」
「自分からやらせていて!?!」
「ていう事でこんなモノを用意してみました!」



大人のオモチャ



「うわぬ、理不尽かつ、どこでそんなモノを用意したのかと言う突っ込み所でぐちゃぐちゃだ」
「まあ、正直死ぬほど恥ずかしかったです」
「ああ……うん、頑張った……ね？」
頭を撫でてくるコイ。



「て言う事で、これを今からコイに使うからな」
「ええええ……やっぱ、そうなるわけ……？」
「なんだよ、少し顔がにやけてるぞ？少しは気にな
るんだろ？」
「まっまあ、ちよって興味はってなに言わせるの
さ♡？」
「隙あり♡♡」



「またない。スイッチ、オンって♡」
カチッ
「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」



「はっはひええええ」
「おっ、おまんこ、震えひえ…あひいひい」
「ゲ、ゲこめひえ、これにやのすぐイッちゃ…
んおほおおお」



「おーいってるいってる。イカされた十倍はイカせてやるからな〜」
「ぞっそんなにや、そんなにやの…」
ソクソクソク
「こわれりゆうろ、こわれちやうのみおのみお」

一時間後

「はひっ……あひっ……はひひい……」



「よしノルマ達成だ」
「よくがんばったな」
ふふ言ってユイの頭をなでる



「まっひえ…いま、優しくなれたら…」
シヨロロロロロロ…
「嬉しくておしっこもれちゃう、みにやいで、みにやいでえええ」



「大丈夫、嬉シヨンこが可愛いや♥」
「恥ずかしいの♥♥」



「おえ、ゲン…君ってほんてーに変態だよわ？」
「俺は俺の性癖に正直でありたいだけだ」



「自信満々で最低な事いってるよ！？まあ…：…解らなくはないけど、さすがに自分がされることなるてかなり恥ずかしいんだけど」

流石にイヤがるコイに頼み込み、変態極まりない衣装を着せ、これまたいやらし格好で拘束する



「でも、興奮はしてるんだろ」
コイのパンツからは、まだ触ってもいけないのにポタポタと愛液が滲み出してくる
「う……うう、いじわる……」

「チーで...ここから責めよかな...なぬ、こ
い」
「わっ...なんか凄いイヤな予感が...」



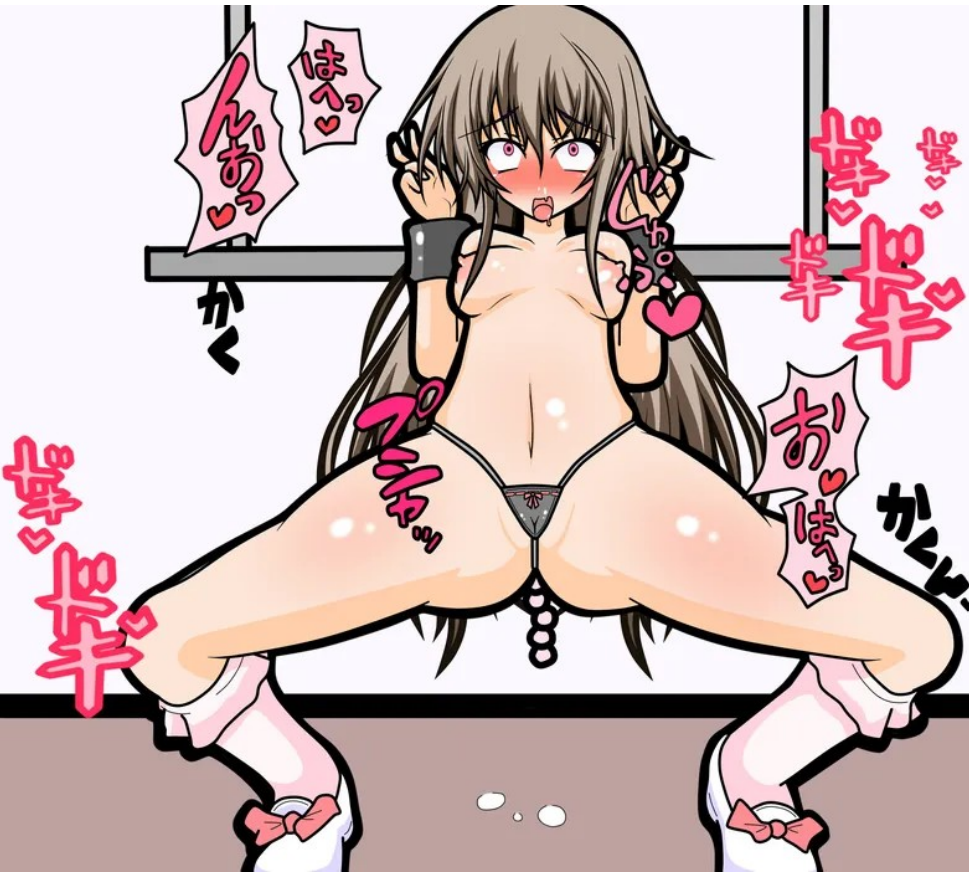
「そう言えば、ここってまだいじって無かったよ
な?」
ツンシン
「ひゃうう♥?ちよってまってそこは...」

ツプウウッ
「おしりのあにやああ、ちよって、まっひえ……そ
こ、きたにやいかりやあ」
「コイのなら汚くなんかないぞっ」
じやほじやほ



「ほひよおおお！そ、それにや、お決まりの台詞はい
いかりやああ！じやほじやほすりやの待って〜」
「でも、コイ。あっげえトロけた顔してるぞ？感じて
るのか？」
「うっ、ちよって、これにやのしらにやいかりやああ」

「じゃあ、これ使ってみようぜ」
「アナルビーズ」
「ボクの話きいてないっ」
「ほらっ、いくぞ」

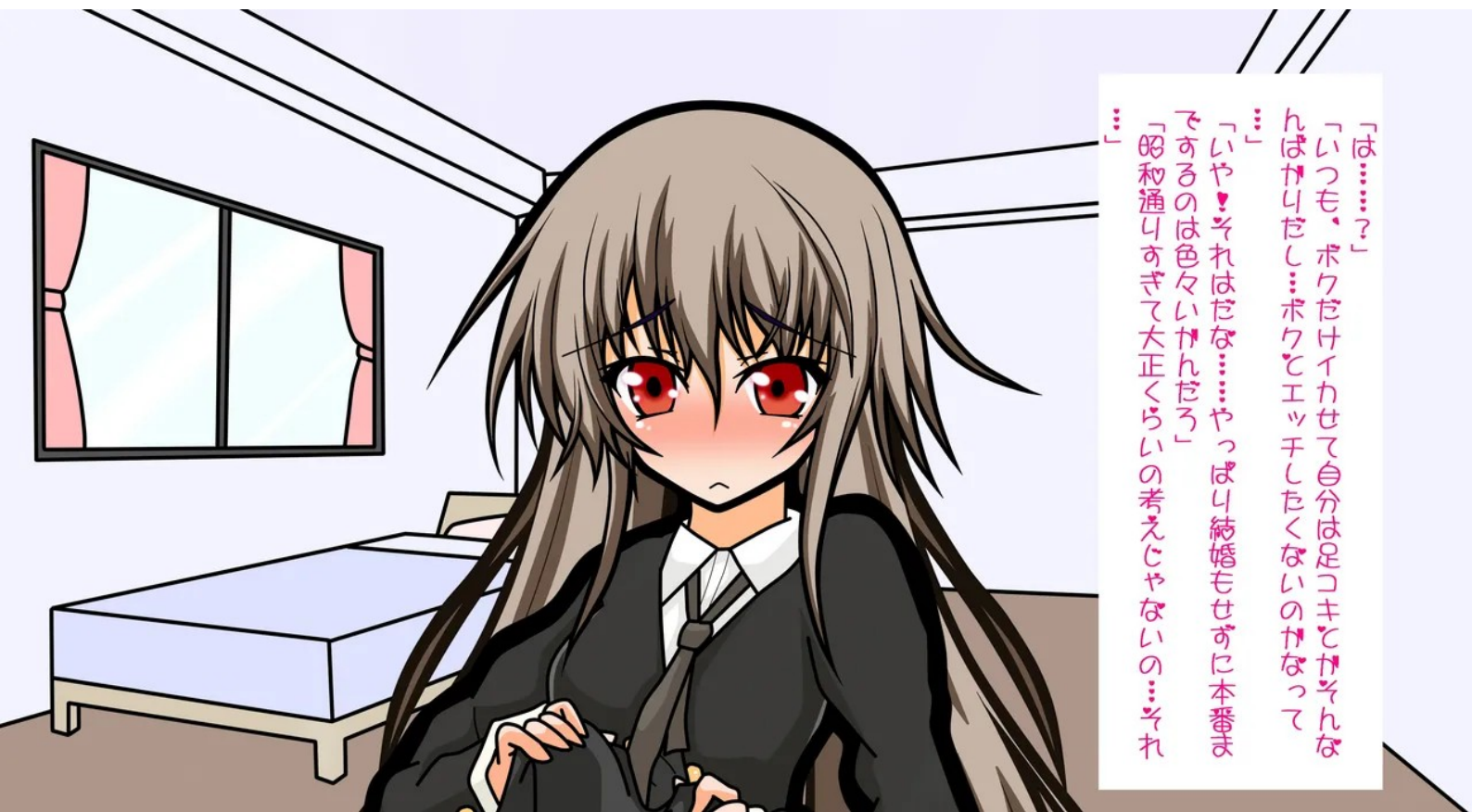


ツプッ
「あひっ」
「ほらっ、いくぞ」

そんなこんなでユイでの生活も其なりに長いこと続いて来たわけだが……
むすううう……
最近、なんか異様にユイの機嫌が悪い様子です
「あっ、あのユイさん……？ なにか悪いことしましたでしょうか？」



いや、心当たりはある。
アナル開発しようとしたり、変態全開な衣装を着せたり、思い当たる事はかりだ
「おえ、ゲン」
「はっ……はい……」
「ゲンはボクでセックスしたくないの……？」



「は……？」
「いつも、ボクだけイかせて自分は足こきとかそんな
んばかりだし……ボクがエッチしたくないのになって
……」
「いや♥それはだな……やっぱり結婚もせずに本番ま
でするのは色々いかなだろ」
「昭和通りすぎて大正くらいのも考えじゃないの……それ
……」

「いや大正だと夜這いの風習も残ってるし案外そうでもないんじゃない？」
「知らないよ？って言うが、本番寸前までやっていて、今さら過ぎるよ貞操が！」
「……そんなに、ボクに魅力ない？」



「……んなことわえよ。お前以上なんや俺には高望みも程があるっての」
「それより、お前は俺なんかでいいの？お前なら……」
「ゲンがいい」
「……はあ。俺の負けだ。俺もコイ、お前がいい」



「触るぞ……いいんだよね……？」
「……君って、なんか変な所でへたくしたよね」
「うるさい、コイだって女の子なんだから気を使うだろ♡」



「オシリの穴でか遠慮なくかき回されたけど？」
「……あれは、あれだ」
「……はいはい」
「いっからな？」



クチユ
びぐらうら
「はっ？？はひっっ♡♡♡」
コイの体がびくんとけする
「じゅっ、じゅっいね…好きな人に触ってもらえりゃ
だけで、こんなにやに感じがたが違うにやんて…」



プシヤー
「いっっちやっら……んほおっ♡まっまってゲニ、
いま、いって、今いってりゅ……」



「はあ…はあ…ゲンだけズルい♥♥」
「はっ…?」
「ボクだってゲンを気持ちよくさせてあげたいの
に♥♥!今度はボクがゲンを気持ちよくさせてあげ
る♥♥!」
そう言うてコイは俺を押し倒す。



「ゲン、初めてあげるからね……慣れてないから
へたかもしれないけど……」
「んなん……俺だってそうだよ」

「嬉しい♪」
「……まあ、そうだな」



「はあ、はあいっぱいみたね……もう一回してみ
か」
「もう、ホントにこまらないからな……ま」
「しつこいよ」
イタズラにコイが笑った。

END

おまけ

二時間後
「あえええええ……おっおまんこ……もう、はいらにや
…」

おまけ





「んおおお」
「でりゅ、精子でてりゅらう」
「あへえええ」

翌日

「……………おは……………あれ♡♡?」

デレデレ →



続く